

2022年2月8日 Vol.190

### 投資家の関心はインデックスから個別銘柄へ

日経平均やTOPIXの調整とともに個別銘柄、とりわけマザーズ上場の新興市場銘柄の大幅な下落が続いてきた株式相場ですが、忘れがちなのは企業の本質的な価値です。株式投資は株価の変動だけに目が奪われがちですが、企業業績内容、ビジネスモデル、将来展望などを無視した需給だけを拠り所にした投資家の取り組み方は株価の下落の中で限界が来ると思われます。インデックス運用であればマクロ経済、政治や社会全般に影響を受ける度合いは高いかと思われそうですが、マクロ経済とは一線を画した成長を目指す個別銘柄に焦点を当てての運用がここに来て復活の兆しが出てきました。また個別銘柄には施策として株主や新たな投資家を呼び込む施策が取られ、これを契機にインデックスとは無関係に株価が変動することもあり得ます。最大の株価上昇に貢献するのは業績の向上ですが、これは需給悪化の中で必ずしも株高にはつながらないこともあります。つまり株価に織り込まれているケースです。これに対して増配や自己株買いといった施策は株価の位置によっては効果をもたらすことがありますので投資家は銘柄選定のポイントとしてそうした可能性を考慮しておきたいところです。株価低迷時の企業のIR活動の積極化も比較的株価の刺激要因となるかも知れませんが、先行きが読めないのは投資家だけでなく企業もそうだろうとは思いますが、その中で投資の拠り所となるIRメッセージを投資家は心待ちにしているのかも知れません。

全体相場が下値模索の中で個別銘柄ではバリュー株投資への関心が高まり、かつて大活躍した中小型成長株の株価下落が顕著になってしまいましたが、個別銘柄にはむしろ活発な値動きを見せる銘柄も登場しています。例えば、長年開発に取り組んできた空中ディスプレイがセブンイレブンのコンビニに大量導入される見通しとなったアスカネット(2438)の株価は長期低迷状態からここに来て商いを伴って一気に反転上昇の動きが見られます。夢の技術が現実にビジネス化される訳ですから理想買いから現実買いに移行することになります。

こうした長期下落銘柄の中から復活する事例を横目に個別銘柄への関心が高まる流れは今後も広がりを見せる可能性があります。市場ではこうした夢を求めた結果、株価が異常な株価の水準となりその後の長期低迷につながったという銘柄が多いためです。夢を語りがちなIPO銘柄も多くは期待先行でPERが高くその後の株価凋落につながることも多いのですが、そうした反省機運を経て理想として業績が現実のものとなると再び株価は上昇トレンドを描くことになると考えられます。2月3日から始まった今年のIPOは公開初値が公開価格を下回ってスタートするなど波乱の船出となっています。3日の訪問看護サービスを展開するRecovery International(9214)が公開価格3060円に対して初値は2640円で14%下落。4日の美容業サポートサービスのセイファート(9213)も公開価格1120円を8%下回る1030円の初値となりました。これらの低迷状態の株価は割安感や今後の成長期待、ビジネスモデルのユニークさなどで見直しの余地が生まれます。冷静に企業価値を見出す活動がここでは求められていると言えます。(東京IPOコラムニスト 松尾範久)